

Isolation Heart

Earth Coincidence Control Office

ECCO is always near to you.

We are given myself by our sense,

we are been to be tied to it.



QSBsb25nIGxvbmcdGltZSBhZ28

sIEkGbG9zdCBteSBib2R5LiBCdX

QgSSdsbCBoYXZlIGZlbHQgYSBwY

WluLiBFdmVyIGV2ZXIgZXZlciBl

dmVyIGV2ZXIuLi4gSS4uLkkgY2F

uJ3QgYmVhciB0aGlzIGFjaGUgYW

55IGxvbmdlci4=

第1章 夜の

始まりへ

1・1

暗闇はひどく人を不安にさせる。未だかつてない、これほどまでに明るい夜を手に入れた私達でも、その恐怖は変わらない。この世界から、浮き上がってしまったような居場所のなさ。そんな夜に、しつとりと落ちてくる雪は、これが夢の

続きであるような錯覚を与えてくれる。

でもこれは現実だ。絶対的な証拠はどこにもないが、この肌を刺す風が、口から吐き出る白い息が、確信させてくれる。

たった数メートル地面から離れただけで、駅の連絡橋の上は凍え死んでしまいそうなくらい寒いし、心細い。うつ伏せになって、もう一時間ほどは経っている。待ち続けるだけというのは、かえって神経をすり減らしていくのだ。

傍らに横たわる、黒く重たい塊。やけに長い。狙撃銃というものか。あまり詳しくないからよくわからないけれど、信用できる強さを感じる。私はこれで、いずれやってくるであろう獲物を、仕留めなくてはならないのだ。もちろん、銃を

撃ったことも、握ったことも、そもそも今まで本物を見たことすらなかった。それでもやらなければならないという緊張は、凄まじかった。

—— 悴む手が携帯で震えた。いきなりの音と振動に、心臓がすこしドキッとなった。アヤメさんからの電話がかかってきたのだ。ポケットから取り出して、私は電話に出た。

「もしもし、聞こえる」

「はい、聞こえます」

当然のことだけど、確かめておこうと決めていた。この夜のなかでは、普通であることすらも心強い。

「良かった。それじゃあ確認するわね」

「はい」

「いま、瀬玲奈ちゃんと一緒にアイツを追いつめてるところ。結構すばしくて、もう少し時間がかかるかもしれない」

片手間にスコープを覗き込む。確かに動く影は一つもない。

「だから、慌てないでいいから」

「了解です」

「それじゃあ、準備お願いね。それと

—— 「呼吸を整える間の後」—— 余計なことは考えなくていいから。自分ができるんだぞ、って思い込めば案外なんとななるって、さっき言ったでしょ。本当にその通りだから。自分を信じれば、後はあの子達がバックアップしてくれる。自分を信頼して。本当に、それしかないから」

大人びて、けれど柔らかい声は、とても大きな心の安らぎを与えてくれる。

「はい、わかりました。……信じてみま
す。自分を」

だけどその返事から、自信のなさがにじみ出ていることぐらい、自分でもわかって
いた。

「うん、じゃあ、頑張って」

電話は切れた。

静かな暗闇で、私は彼女の言葉を反芻する。先の言葉は、彼女が本当に、たった二年ほど早く生まれてきただけなのかを疑いたくなるぐらいだ。でも彼女は私の想像を超える出来事を、今までずっと、たった一人で乗り越えてきた人なんだ。だから、こんなにも強くて優しくなれる

んだろう。身勝手な納得だけれど、私はそれで満足した。

だから後は自分のやるべきことをするだけ。

そう覚悟して、私は時を待った。

1・2

(1)

酷い目覚め。悪い夢を見ていた。何か心の奥底から這い上がってくる、得体の知れない恐怖に顔を叩かれたような気がした。枕を見れば、汗でぐっしりと濡れている。いくら寒くて毛布を三枚重ねて寝ていたからといって、こんなにも汗をかくなんて。窓を見ても、まだ外は真っ

暗だった。時計は午前五時前。カチカチとなる秒針の音。二度寝しようにも、もう一度あの夢を見るのかと思うと、寝られなかった。

なのに、肝心の内容は何一つ覚えていなかった。

(2)

結局、目が覚めてからずっと、ただ布団に包まっていただけだった。薄っすらと明るくなってきた空を見て、私は一階へ降りた。

「おはよう、華南^{カナナン}」

いつものことだが、お母さんがお弁当を作っていた。

「うん、おはよう」

適当に返事をして、顔を洗う。冷たい。だから冬は嫌なんだ。冷たさは痛い。でもお湯が出るのを待つのも面倒だし、結局我慢する。

けれど、それのおかげで目も覚めた。

髪を整えて、制服をハンガーから取って、そのままストーブの前を占領する。

パジャマを脱いで、直に肌に当たる熱は、すこしピリピリした感覚だから、長くは当たってられない。寒いし痛いしで、だらだらと着替える暇はないのだ。

「お母さん。体操服どこ」

パジャマを洗濯物のかごに入れて、ついでに干してあるはずの体操服を探したが、見つからなかった。

「ええ、しらんよ。どっか棚に入っていない？」

「棚？」

お母さんはいつもそんな手間のかかることとはしない。基本的に自分の服は自分で片付けるのが、我が家の暗黙の了解だった。だから、まさかとは思いつながら、下着やら靴下しか入っていないはずの、姉妹共用の引き出しを漁る。

「あ、あった」

ぐちゃぐちゃに丸められて、無理矢理に押し込まれていた。しわしわなジャージ。お姉ちゃんの仕業だ。間違いない。こんなにがさつなのは、この家では姉しかないのだ。でもなんで……。

まあ、どうでもいいか。

カバンをとってくるために、二階にまた上がろうとする。その時「華南、ついでにお姉ちゃん起こしてきて。もう時間だぞって」

お母さんからの指令が飛んできた。

こんこん、ノックをしても反応はない。

お姉ちゃんの部屋は、私の部屋の横にある。ちょうど、ドアの位置関係は直角だ。

返事はまだ返ってこない。仕方なく、私は先に自分の部屋で用意を始める。教科書を詰め込んで、何度か今日の時間割と合致しているか確認した後、バッグを担いで出た。結局起きてくる気配は微塵もなかった。だから、もっと激しくドアを叩いた。

「お姉ちゃん、朝だよ。起きて」

扉越しでも十分に聞こえると思う大きさで言っても、一向に反応がない。しょうがないので、中に入ることにした。姉妹の部屋へ入ることに抵抗感のない人は、この年になると少なくなるんじゃないだろうか。

「入るよ、お姉ちゃん」

ひどい寝相。ベッドから体の半分が飛び出ている。

「ほら、起きて」

ばつと、布団をはがす。物の散乱した床に足の踏み場はないも同然で、その動作も一苦労だ。あああああ、と呻く姉。

「あ、それ、私の体操服じゃん」

あそこに体操服があったのは、お姉ちゃんが使ってたからなのか。

「ねむい」

「眠いじゃない。起きて。仕事でしょ」

「まだ冬休み」

「うそつかないでよ。あと、なんで私の服着てるの？それパジャマじゃなくて体操服なんだけど」

「使ってたから」

「使います」

「それは今日からでしょ」

「ああーもういい。ちゃんと降りてきてよ」

部屋を出る。返事が返ってきたのは、私が階段を降りかけたときだった。それに、うんうんと適当な返事をされると、あまり気持ちは良くない。

ああ、冬休み明け初日から、なんだか

嫌だな。

(3)

忘れ物は、ない。ポケットやバッグの中を何度も確かめて、お弁当もしっかり持った。経験上、長期休暇明けは忘れ物が多い。小学校の頃は雑巾だったり、中学校のときは教科書だったり筆箱だったり、大変な思いをしてきたのだ。

「いつてきます」

「いつてらしい」

洗い物をしながらお母さんは返事を返してくれたが、お姉ちゃんからは何も無い。テレビを見てるだけだった。

はあ、寒い。

まだ薄暗い朝。

人通りも少ない道。

凍結した道路で滑りそうになるが、かろうじて回避できた。夏だったら駅まで自転車に乗って行けたのだけれど、冬は歩きで行くしかない。冬休みをぐーたら過ごしていたせいだろうか、少し歩いただけでも疲れる。

十分ほど歩いて、駅に着いた。それと同時に、駅から大勢の人が出てくる。向こうからの電車が到着した合図だった。バス停に向かう人の流れをかくぐりながら、私は改札をくぐり、エスカレーターに乗って、駅のホームに上った。

エスカレーターを降りて左側に止まっている電車に乗る。出発時刻は7時40

分頃。今の時刻は25分頃。この時間帯に來れば、確實に席に座れるのだ。駅から近いところに家があるから、もっとゆつくりしてもいいんじゃないかと、よく言われる。でも家にいて時間を潰すのも、ここで座って待つのも大して変わらないのだから、早く来ているのだ。

いつもの席、立ち上がる時のことを考えて、私は通路側の席に座ることになっている。窓側に座ると、席を立つために通路側の人の足を避けないと行けないし、そのときに足と足がぶつかったりするのが、気まずいのだ。幸いに誰にも座られていなかった。車両の先頭から数えて、二つ目の出入り口が、ちょうど到着駅のホーム階段の目の前になる。ここに座れ

ばスムーズに降りることができて、列に巻き込まれることがない。目の前の人の足の遅さに、イライラせずに済むのだ。断っておくが、私はせっかちなわけではない。他人の歩調に束縛されるのが嫌なだけなのだ。特に朝は。

まだ車内にいるのは、何人かの乗客だけで、その殆どは高校生だ。みんな手元に集中している。私もそうだ。入学当初は、文庫本を読んだりしたが、今では携帯を触っている。段々と、取り出したりするのが面倒になったり、少し周りの目が気になってしまったのだ。自分だけ本を読んでいる疎外感。感じなくてもいいものを、感じてしまったのだ。

ふと時計を見るとすでに40分になっ

ていた。乗り換えの人たちで、いつの間にか車内はいっぱいで、少し窮屈。がたんと、音がなった。電車が動き出した。動き出してからもう10分ほど経った。二つの駅を過ぎて、そろそろ私が降りる駅に着く。

バイブレーション。通知がきたのだ。携帯のロックを外す。誰からなのかは検討がついている。セレナだ。

『おはよー』

『いまおきた』

いつも彼女はこうやっていちいちメッセージを送ってくる。友達がいつ起きたとか、あまり興味はないから、いつも無視している。まあ、あっちもそれを承知でやっているのだらうけど。時国^{トキクニ}瀬玲奈^{セレンナ}、それ

が彼女だった。中学校の頃から、同じ塾に通っていた友達。いつからかはよく覚えていないけれど、一番親しい人。彼女以外に、友達と言える人は正直言っていない。でもそれだいたいと思っている。

揺れる電車。ちらほらと立ち上がる人は、おそらくその殆どが同じ学生だろう。私も携帯をしまつて、右の扉の前で待つ。甲高い音を立てて、電車は止まった。

『開く』のボタンを押して、私は電車を降りた。階段を登って、連絡橋を渡って、降りて、改札をでる。

冬の空。

寒い。

ここから15分ほど、学校まで歩く。駅を出て左を行く。少し前の、富山方面

から来たであろう人たちを越していく。程なくして、脇道に入る。ここまでくれば、人も少なくなる。途中、何人かの人に抜かれながら、やっと学校の目の前までたどり着く。しかし、ここからが問題なのだ。玄関までの坂道。しかもかなりの傾斜があつて、登るのも一苦労。坂を登り終わった後は、羽織っているコートが邪魔に思えるほどの、じんわりとした汗をかきながら、四階の教室を目指す。やっとこさ、私は教室にたどり着いた。

「おはよう」

返事を返してくれるのは、耳の空いている二人ぐらい。そもそも人の少ない朝の教室は、驚くほど静かだ。みんな携帯で動画を見たり、音楽を聞いたり、ゲーム

をしたりしている。私もその一人だ。冬休み明けだからといって、この時間帯の人たちは騒ぎ立てるようなことはしないのだ。冷たいのか大人びているのか、はたまた面倒なだけなのか。私は、ただ面倒くさいだけなのだが。

ちょうど真ん中らへんの机が、今の私の席だった。前過ぎず、後ろ過ぎない、先生の目も手薄な席で満足している。

バッグを机の横にかけて、席に座る。教科書や筆箱を取り出して、環境を整える。

あとは、8時50分の一コマ目の開始時間まで、また携帯で暇つぶし。音楽の趣味はないので、もっぱらゲームかニュースの閲覧。イヤホンを取り出して、ジャックに差し込む。両耳を塞いで、ゲームを

始める。最近は周りの影響もあって、リズムゲームをやっている。面白いのか面白くないのかよくわからないが、キャラクターが魅力的なのでやっている。けど肝心の才能は、これっぽちもないのであった。

何曲かやり終わった後、チャイムが鳴った。五分後には、またチャイムが鳴って授業が始まった。

国語の授業。内容は、現代文。一コマ90分は、やはり長い。一つの科目で普通校の二時間分を潰すのは、無理があるのではないか。時折、というか最近はどう愚痴を吐きたくなる。

結局、ぼーっとしている間に授業は終わってしまった。

(3)

二コマ目の数学。数学それ自体は、あまり得意でもなく不得意でもない。なんと言うか、平均点の少し上をふらふらしているという感じだった。組み合わせ、順列の授業。□や○やら新しい記号がどんどんと導入され、こんがらがってしまった。わかりやすくするために、板書をマーカーペンで色分けする。どんどんと出来上がってくるノートに、私はほんの少しの満足感を味わう。ここ最近、やっと自分の勉強が、中学から先の高校の勉強だという感じが出てきた。けれど授業は単調というか、端的というか、とくに過不足のない教科書通りなもの。しかも、いかにも寝てくださいと言わんばかりのも

の柔らかい先生の声のせいで、時たまに居眠りをしてしまうのだ。

まさに今、まぶたは重く、閉じかかっていた。早起きのツケが回ってきたのだ。

耐え難い睡魔が私を襲う。締め切った教室の、こもった空気。汗ばむ熱気。頭が、沈む。

……。

……。

「起きてください」

肩を叩かれた。私はとっさに顔を上げて、「あ、はい、起きてます」と言った。足音が遠ざかる。また眠気が。目がショボショボしてきた。抗えない。教科書を盾にしてごまかそうとする、そんな余裕すらなかった。だからもう生理現象なのだ

からしようがないと、半ば開き直って、もう寝てしまおうと思った。ほんの五分だけ。そう決めた。

うとうと。

ウトウト。

「起きてください」

また頭上で声がする。

「起きてください」

段々と大きくなる。

黙って顔をあげる。目は閉じたまま。それでも、先生は起きたと判断したのだろう、前に戻っていく。机に突っ伏す。限界だった。どうしてこんなにも眠たいのだろうか。考えることもできない。

眠い。眠い。眠い。ねむい。ねむい。ねむい。ねむい。ねむ……。ね——。

「起きてください」

起きて。

起きなさい。

起きろ。

起きます。

「じゃあ、詠さん。前に出て答えを書

いてください」

詠華南——私の名前。呼ばれるま

に、前に出る。ふわふわとした意識が、足

元をふらつかせる。教壇を上がり、チヨ

クを持って黒板の前に立つ。深い緑色。

なんだか薄くなっていく。

「じゃあ、そこらへんに答えを書いてく

ださい」

答え……そもそも問題が分からない。

「えっと」

前の席の人に見せてもらおうと思った。

後ろを振り向く。

ざわざわと音が聞こえるだけだった。

「えっ、ここ、どこ」

思わず口から溢れる。

——。

しばらくの内、やっとここがどこか理

解できた。

学校の裏の竹林だ。

確かに、円柱の数々は微かに茶色がかつ

た緑色をしていて、先端には葉っぱみた

いなものが付いている。でもただそれだ

けだった。クラスメイトも、先生も、教室

も消えて、雪の被った竹林にただ一人。

ざわざわ。

ざわざわ。

ざわざわ。

ざわざわ。

葉の擦れる音。だんだんと大きくなつてくる。私を取り囲むように、反響して

増幅して交響していく。うるさい。うるさすぎる。耳を塞ぐ。塞いでもまだ聞こえる。耳と手の、ほんの僅かな隙間から入り込み、外耳の中で増進していく。

息が荒い。なぜか焦りを感じている。怖い。

耐えられなくて、私は叫んだ。

「誰かいませんか」

何度も、何度も、喉が破れるくらいに大きな声で。けれど何も帰ってこない。ざわざわとうるさいだけ。なんで。なんで、なんなのこれ。誰かどうか、どうか返事

をください。

「起きてください」

聞こえた。確かな人の声。

「起きてください」

起きている。私は起きている。

目は覚めている。これほどまでにはつきりした意識を感じたことは、ないかもしれない。

それとも夢なのか。

分からない。

ほっぺをつねってみる。

——痛い。

「起きてください」

真後ろから聞こえる。

私は、振り向いた。

「起きぐだサイ」

真つ白な世界に、真つ黒でまんまるな、影があるだけだった。

ああ。

あああ。

ああああ。

アアアアアアア——。

「あつ」

「それじゃあ、詠さんに……ああ、お休み中ですね。じゃあ——」

紛れもない先生の声。目が覚めた。汗でノートが濡れていた。ゆっくりと顔を上げて、周りを見える。何も変わってない。あの風景は、結局夢だったのか。でも、あんなにも現実味を帯びた夢、記憶にこびりつくような夢は、今まで見たことがなかった。額に手を当てる。少し熱

いが、風邪を引いているほどではない。ぐったりとした体。

時計を見れば、後少しで授業は終わりそうだった。

(4)

チャイムが鳴った。一斉に立ち上がるみんな。私も立とうと思ったが、なかなかふらつくし、少し落ち着いてからにしようと思った。

「おい」

聞き慣れた声がある。教室の後ろのドアから身を乗り出して、セレナが私を呼んでいた。

「ごはん、いこ」

うん、と返事をして、一度深呼吸をして、

「えー、そうかな」

バッグから弁当箱を取り出して、彼女の
方へ向かった。セレナはいつも弁当じや
なくて、学食で昼ごはんを食べている。

鏡を見て確認する。そんなに赤いかな、
と思っっていたら、セレナが何かに気づい
たような顔をした。「あ、よだれ付いて
るじゃん。居眠りしてたんだ。あれー、

だから私は彼女に付き合っ、一緒に食
堂でごはんを食べる。食堂は一旦外に出
ないと行けない。薄暗い廊下を歩いて、
階段に向かおうとする。バカ騒ぎしてい
る男子の、いくつかのグループをかき分
けて、私達は前に進んでいった。

居眠りはしないものなんじゃないの？」
私のほっぺをグリグリしながら、セレナ
は笑った。手洗いしたての手についた水
が冷たい。

「あ、セレナ、トイレ行つてきてもいい」

「セレナが言えることじゃないでしょ。寝
すぎて怒られた人に、言われたくない」

「うん、わかった」

「私はしょうがないの。バイトしてるか
ら」

彼女はそう言ったが、やっぱりあたしも
行くと、一緒についてきた。

「学生でしょ。本分は勉強。私は、勉強
しすぎて疲れて寝ちゃったの。私のほう

「なんか顔赤くない」

セレナが聞いてきた。

「がエライ」

「はあ、もうそんなことで偉そうぶるなんて、子どもだな、カナンくんは」

確かに、私の言葉は子供じみていた。だから、私達は笑いあつた。

「はいはい。じゃあ行こう」

ハンカチで手を拭きながらトイレを出て、階段を降りて、私達は校舎をでた。

学食にはすでに多くの人間が並んでいた。食券機に並んでから、と列に付いた彼女を置いて、先に席を探す。窓際の机の端に、ちょうど向かい合つて座れる席が空いていたから、そこに座つた。しばらくすると、セレナはきつねうどんを持ってきた。安いが、それ相応の味らしい。私もお弁当を取り出して、食べ始め

た。今日の献立は卵焼きと野菜炒め、それにおにぎりだった。

もぐもぐと口を動かしながら、セレナは突然聞いてきた。

「そういえばさ、カナンってなんか夢とか見るの？」

「なに急に」

「いや、居眠りするってことはさ、夜に寝られないってことですよ。ということ、怖い夢とか見るのが嫌だとか、そんな感じかなって。私は小さい頃そうだったの。お化けのする夢を見るのが怖くて、寝たくないって大泣きしたこともあつたんだって。お母さんが言つてた」

「夢が怖くて寝れないって、合つたとしても小学生まででしょ。私は一度もなかつ

たけど」

「じゃあ怖い夢を見て、起きたりとかは」

「それは……たまにあるね。今日もそうだったの。内容は何も覚えていないけど」

「やっぱりあるよね。あと、なんか見覚えあるなーっていう夢を見たことってある？ 私は何回かあるの」

「ふーん、でもさ夢は記憶を整理しているだけだって、どっかに書いてあったよ。

だからおんなじ夢って見ないんじゃないの。毎日記憶はさ、新しく追加されていくんだし」

「そうかもしれない。けどカナンは知ってる？あのさ、ずっと夢日記を書いてた人がいたの。で、その人がなくなった後に、旦那さんだったかな、その人の日記

を読んだら、おんなじ夢の内容が周期的に書いてあったんだって」

「へえー、じゃあセレナの夢もそうなの？」

「覚えてないから分かんないけど、たまに今日はこんな夢を見そうって思うことはあるよ」

「覚えてないのに？」

「うん。だから小さいときに寝たくないって泣いてたのかも」

「なんだか話が脱線しているようだった。お互いに何を聞きたかったのかを忘れた様な、無言の間。」

「あ、どうなの。カナンの夢って」
セレナのうどんはもうなくなって、彼女は暇そうに割り箸の先を噛んでいた。

「うーん。まあ、さっきのは怖い夢だったのかな」

「さっきのって、居眠りしてた時の？」

「うん。すごく短いんだけど、すごく怖かった」

「怖い夢かあ。居眠り中に夢なんて、私は見たことないなあ。……どんな夢だったの？」

箸が止まった。意図的に思い出すことを防ごうとしているのか、一瞬、頭の中が真っ白になった。

「えっと、どんなのだったかな。すごい変な夢なんだけどね、学校の裏にさ、竹林ってあるでしょ」

「うん、あるね」

「そこに突然、立たされたっていうか、

気づいたらそこにいるって感じで、立っ

てたの。不思議なのが、そこがどこか無意識にわかってたみたいで、周りに竹しか見えないのに、ここが学校の裏の竹林だってことを受け入れてたの。で、ざわざわって音がうるさくて、うるさいなって思った瞬間に先生の声が聞こえて、後ろを振り向いたら、真っ黒な球体みたいな感じのやつが浮いてたの。それを見た瞬間に目が覚めて、なんか、すごい汗かいてたの」

「それ普通に怖くない？なんか憑かれてるのかも」

「やめてよ。私幽霊とか信じてないから」

「でもなんか妙にリアルだよな。やつぱり何かあるんだよ」

「偶然だつて」

神妙な顔で、セレナは私を見つめていた。

確かに不自然な夢だが、夢とはそういうもののじゃないのだろうか。「そうだ、

宿題あつたんだ」

とつさに立ち上がつて、セレナは食堂を出ていこうとする。

「えーもう行くの？」

「ごめん、宿題やってないから。またあとでね」

セレナは騒がしく走り去つて行つた。

なんだかもう、食欲が失せてしまった。

残りかけのごはんを残して、私は弁当を片付けた。食堂を出て、教室へ帰る道すがら、裏の山を見る。あそこはどうなっているんだろう、不意に思った。でもす

ぐに、どうでもよくなつた。

1・3

授業が終わつた。一斉に帰りだす人の流れ。私もそれに乗つて、教室を出て、階段を降りていく。入り口の前。そのいくつかの溜まりの中で、セレナは待つていた。向こうも気づいたのだろう、私の方へ駆け寄つてきた。でもその顔はなんだか、いつもと違つていた。何か予期せぬことが起こつたと、わかりやすく顔に書いてある。案の定、彼女の一声はおかしなものだった。

「見たんだよ！」

興奮と焦りが入り混じつた声色。

「見たって何を」

「夢だよ夢。カナンと全く同じの！」

「嘘でしょ。そんなわけ……」

「でも見たんだよ。私だって信じられないよ。でも、でも、あの、なんて言えばいいんだろう。こう、気づいたらぱっと場所が変わって。それがね、そこがねどこか分かるんだよ。竹やぶ？あ、竹林か。分かるんだよ、行ったことも見たこともなにのに、多分違うのにそこがどこなのか理解させられるんだよ。やばいよねこれ。おんなじ夢見たって事自体、おかしいよね」

「ちよつとまってよセレナ。セレナと私の夢が、本当に同じ夢かなんて誰にも確かめられないじゃん」

「それはそうだけど。でも絶対そうだよ。」

絶対なんかあるよ。ねえ、見に行こうよ」

待ってよ。そういつても彼女は聞かなかった。どこか子供じみたはしゃぎ方に、私は違和感を覚える。でもいかないと。一人きりになるのが嫌だった。行き先は決まっている。私も急いで、彼女を追いかけた。

1・4

(1)

初めてこんな場所にまで来た。学校の裏、夏のプール授業の時に来ただけで、どうなっているのか今まで詳しく見ることはなかった。

ツタの絡まったフェンスを飛び越えようとす。その先は完全に学校の敷地外だ。先に、セレナが登った。続いて私も登ろうとしたけれど、スカートがトゲに引っかかった。そのまま勢い余って、セレナにもたれかかってしまった。「大丈夫？」

「うん、大丈夫」

そう言ったけれど、自分の顔がどれほど暗い顔をしているのかを、いますぐ見てみたい。きつと真っ青だ。暗く淀んでいるはず。

でも今更引き返す訳にはいかない。引き返せないのだ。恐怖と同時に私の心をかき乱す、底知れぬ好奇。それは、セレナも同じなんだろう。

彼女の腕を掴む。二人一緒に、農道らしきコンクリートの道をそって歩いていった。所々に落ちているタバコの吸殻。ここが隠れた喫煙所であるという噂は、かなり有名だった。日当たりも悪くて、しかも冬だ。あたりはすでに薄暗く、気味が悪い。伸び切った雑草と、整備の行き届いていない古い道。どんどんと急になっていく坂道を登った先、なにか小屋らしき建物を見つけた。

その先は完全に藪。行き止まりだった。

チャイムの音が聞こえる。

セピアな景色。

立ちすくむ私達。

「ねえ、カナン。帰ろうよ。ここ入った

らダメなんじゃないの。誰かの土地だよ。
不法侵入だよ」

疲れ切った声だった。私達はただ、夢に
踊らされただけなのだろうか。

けれど、私はそうは思わなかった。

ふと、何かに呼ばれた気がした。

「カナン、カナン、帰るよ」

肩を叩かれる。彼女の声は、耳に入っ
ている。だけど、頭の中には入ってこな
かった。

あの時と同じだった。

ざわざわとうるさい。

これも夢の中なのだろうか。

明晰夢の中に居るような、居心地のも
どかしさ。

揺えられる体は無気力で、今にも崩れ

落ちそう。

——私は目を疑った。

「ねえ、あれ、ヤバくない？ヤバイっ
てホントに、ねえ、ねえ」

セレナの声。恐怖に震える、確かな声。

でも、私は違った。出せないのだ。声ど

ころか体すら動かない。

目の前の歪みを、直視させられる。

現実にあるべきでないもの。

それはとても、あの時の夢に、似てい
た。

(2)

まるで抽象画の世界からひょっこり出
てきたような化物。緩やかな楕円と鋭利

な三角形が組み合わさった胴体に、波動のように幾何学的な模様が絶えず動き回って、眼が痛い。そして現実離れた異型から、ところどころに生えたヒトの手足。

ただそれだけが纏う現実感が、紛れもなく今襲いかかる、私達の危機的状況をまじまじと誇張してくる。

「カナン、ねえカナン！」

引っ張る力はさらに強く、その声も耳をつんざく。でも、セレナの必死さに反比例するかのように、私の意識は薄れていく。なんだろう、何も言えない。返事をしたくても声が出ない。足が動かない。金縛りにかかったように、自分の意志で体を動かすことができない。終いには手足の感覚が、じわじわと消えていく。

だけど目が離せない。あの異物から瞬きすら拒ませる何かを感じる。

「ねえカナン！ 逃げよう、逃げるんだよ！」

張り詰める言葉に伴って、化物はこちらに歩み寄ってくる。歩いているのか走っているのかも分からない歩幅で、しかし確実に私達を捉えながら。

「どうしちゃったのカナン！ ヤバイよあれ、早く、早く！」

ダメだ、何も出来ない。本当に何も出来ない。震える脚は歩くことを忘れて、立つことすらままならない。

怖い、怖い怖い怖い、怖いよ、誰か助けて。

やっと、恐怖心だけでも取り戻せた。

けれど、遅すぎた。

いつしか目の前には、どこから開いた大口迫っている。

ああダメだ。そう観念したその時。

背後から飛び込んできた人影が、怪物を、恐怖を、彼方へと吹き飛ばして行った。見慣れない格好をしたその人は、その

のまま追撃の手を緩めることなく、手にした武器のようなもの——剣だろうか——で化物を薙いでいく。一撃、また

一撃と共に、寒空に響く嬌声は人の物ではなく、喻えるならばノイズがかったラジオの高音だった。

圧巻の一言では済まない、その異常な光景に、私達二人はただ立ち竦んでいるだけだった。

それでも分かるのは、さっきまでのお

どろおどろしさなど微塵も感じられないぐらい、あの化物には為す術なく、ただ攻撃を受け続けることしか出来ないということ。そしてその攻撃は、私達と同じ『人間』によってなされているということ。

何かが光った。

それが、この戦いの終末だということは、一瞬の遅れを伴って、理解することができた。

音叉から鳴っているような、均一な高音。

——そして、静かに消えていく化物の骸。

清廉とそれを目視する女性の姿。私達には目もくれず、立ち去ろうとする。

「あの！」

とつさに声が出た。

「ありがとうございます」

なぜこんなにも自然に、感謝の言葉が出てくるのだろうか。自分でも分からなかった。そして直後にこう思った。彼女なら何か知っているのだろうか。いやそもそもこれは現実なのだろうか。彼女もあの化物も、全部——だとしたらそれもおかしいだろうが——全部セレナと一緒に見ている夢に過ぎないのだろうか。遅すぎる疑問の洪水。一瞬、声に振り向いた彼女の目を見る。口元は隠されていたが、彼女がどんな表情をしているのかは、なんとなくわかる気がした。怪訝な顔だった。

1・5

(1)

「あれ、何だったんだろう」

窓枠にもたれかかったセレナが、心底疲れ切ったというような声で、そう呟いた。電車の揺れさえも、強い衝撃として苦痛を感じてしまうほど、私も疲れていた。

「さあ、わかんない」

「夢だったのかな」

「さあ、わかんない」

「でも夢だとしたら、今も夢見てるんだよね」

「さあ」

「ねえ、つねってみてよ。目が覚めるかも」

そんなわけがない。そう思いながら、彼女の頬をつねった。

「痛い。爪食い込んでる」

「ごめん」

どうやら、夢でもなんでもないらしい。だとしたら、私達の頭がおかしいだけで、あれはただ幻覚を見ていただけなのだろうか。セレナはただ、バッグを抱き枕のように抱えながら、夜の街を見つめているだけだ。私もそうするべきなのだろうか。

「このこと、誰かに言うべきなのかな。」

オカルト研究家とか、大学の先生とか」

「忘れたほうがいいんじゃないの」

セレナは、もううんざりしているようだった。考えても意味のないことを、延々

と考え続けるのは無駄に体力を消耗するだけで、今の私にはまったく必要を感じない。

「間もなく、終点——」

電車は止まった。ぞろぞろと降りていく乗客たちに混じって、私達も降りた。

「じゃあね」

改札を抜けたあと、セレナは東口に、私は西口に別れた。彼女はその後、東口のバスターミナルからバスに乗って帰るのだ。

私は歩いて帰る。

冬の夜は寒いし暗い。

電灯も疎らで、さっきの出来事も相まって、怖かった。

それでも倦怠感には勝てず、グラグラと力なく歩みながら、家へと帰っていった。

(2)

「ただいま」

「おかえり」

奥からお姉ちゃんの声。台所に居るんだ。

「あれ、お母さんは？」

「なんか習い事に行くって」

「習い事？ なんの」

「何だったかなあ……編み物だったっけなあ。働いてる人向けの習い事なのかな？」

友達に誘われたって言ってた」

「そう。じゃあごはんは」

「これ。レンジで温めて食べてねって」

ラップのかかった皿が二つ、キッチンに並べてあった。あれ、一つ足りない。確か玄関にはお父さんの靴があったはずだが。

「お父さんは？」

「ああ、父さんは飲み会だって。新年会かなんかじゃないの？二人とも遅いかもだから、寝るときは鍵閉めといてね」

「うんわかった」

バッグをその場に下ろして——いつもならお母さんに怒られているだろうが

——私は脱衣所に向かった。

「温めておこうか？」

お姉ちゃんが聞いてきた。

「いい。あとで自分でする。先にお風呂はいるし」

「あつそう。じゃあ置いとくね。あと、お皿は自分で洗つといてねー」

「わかってる」

ドアを閉めた。

空っぽの浴槽。そういえば、お湯を張っていなかった。まあいいや。もともと風呂に入るのはあまり好きではない。水の圧迫感を感じて、胸が苦しくなるのだ。冬だからと言っても、シャワーを浴びれば十分に温かくなる。椅子に座りながら、数分間ずっと流れるお湯に打たれ続けられ、いつの間にか体は芯までポカポカしている。シャンプーにこだわりはない。家族が買ってきたものをそのまま使っている。ボトルのポンプを押して、シャンプーを手に出す。泡立つ頭。ただシャンプーが髪の毛に残らないようにすることだけは、気をつけている。若い内に禿げたくないのだ。頭の次は、体をボディーソープでしっかり洗う。あとは丁寧に洗

いで、髪の毛の水を切る。入っていた時間は、大凡二十分ぐらいだった。

バスタオルで体を拭いて、パジャマに着替える。洗面台の鏡の前に立って、ドライヤーを取り出す。熱い風が髪の毛を乾かしてくれる。

お風呂を上がると、お姉ちゃんとはつくに夜ご飯を食べ終わって、自分の部屋に戻っていた。ラップを剥がして、電子レンジの中に皿を突っ込む。温まるまでの間に、炊飯器から白米をよそう。適当に時間を設定して、温まったごはんを、リビングに持って行って食べる。料理に興味がないから、今自分が何を食べているのか正確にはわからないが、鶏肉を焼いたやつ、ソーテーなのかな、としか言い

ようがない。とりあえず不味くはないし、食べられるのだからどうってことない。食べ終わった皿を、さっと洗い流す。そのまま食洗機に入れて、洗ってしまおうと思ったが、よくよく考えれば、こんな少ない枚数で使うのはもったいないとわかった。洗剤をたわしに付けて、食器を洗った。

部屋の後片付けなんかをしていたら、あつという間に夜の十時を過ぎていた。いつもならゲームとか読書とか、趣味の時間なのだが、今の状態ではとてもその気にはならない。もう寝よう。玄関の鍵を閉めて、電気を消して上へ登る。いつもより、ベッドに体が沈んでいる気がした。

仏教の部派、^{サルヴァースティヴァアーディアン} Sarvastivadin (説一切有部^{せついつきいうぶ}の中には、意識に関する定量的な記述が見られるという。

それによれば、人の意識は、二四時間に六百四十八万個の「瞬間」によって成り立ち、その平均の長さは十三・三ミリ秒になる。



我々はいよいよ見つけたのだ。上に落ちる林檎を。アイソレーションタンク内の被験者の網膜上に射影した、リングの自由落下運動の逆再生映像は、我々の期待を遥かに超える働きを見せてくれた。

映像に使用したリングを、映像と同時点、研究室に設置した。しばらくするとそれはまるで魔法のように宙を浮き出し、天井へ向かって上昇していった。そしてリングは、映像の端と同じ高さに到達した途端に、ここが地球の重力圏を思い出したかのように地面へと落下していった。

我々はこれを多角的にカメラで収めていた。フレーム数は100で、つまり一秒間に100回の「瞬間」を撮る事ができる。チェックすると、なんとリングが写っ

ていないフレームがあるのだ。それはもう、影も形もない、全くの空。私は興奮した。これはもしかすれば、新しい世界を紡ぐ、始まりの一步なのではないだろうか。

かの遠隔作用の如く、謎めいた運動を振る舞う林檎を、我々はニユートンが古典力学を発見したように、その大いなる導きであることを信じている。

寂しさに潰れそうな私を、瀬玲奈^{セレンナ}がそっと手を握ってくれる。友達同士で手をつなぐことなんて、今までになかったから、その暖かさに驚く。

そして、寒さに身を寄せ合う私たち二人の前に、彼は語り始めた。

「君たちには、悪夢を狩ってもらいたいんだ」

子ども番組に出てくるキャラクターのような愛くるしい声と、その異質な姿。「悪夢？それって、あの時のヤツみたいなの？」

漂う光る球体に、瀬玲奈がそう聞いた。

テスト

「私たちは感覚によって自らをあたえられ、そしてしばり付けられている。」どこかで聞いた覚えのある言葉だけど、よく覚えていない。

痛みが消えて、自分を失う。

そんな人間を、私は何人も見てきた。

第2章 夜の始まりへ

2・1 狩猟の街

人気がない路地裏。街灯も消え寝静まった夜には、昼の街並みとは違う何かがある。ここにあった。

「今日から君たちは『狩人』になる。そしてそれには必ず危険が伴う。まずはそれを理解してほしい」

目の間に浮かぶ球体が幼い子どもの様な声色でそう喋った。可愛らしいマスコットのようなそれは、しかし私達の常識の外側にいる者。『星の使者』彼は自らをそう名乗っている。些か信じたいが、彼らはこの星の外からの来訪者だという。

宇宙人の言葉を信じるのなら、私たちは今から未来を守る為に戦うらしい。身の

毛もよだつ恐ろしい何かと、私たちは彼らのもたらす『武器』あるいは『力』を手に取り、夜の静かな狩りを行うのだ。

「華南^{かなん}、これが君の武器、戦うため守るための力だよ」

「これが私の武器？」

渡されたモノは、夜目にも一際目立つ真っ黒な武器だった。一つは小さい、というかよくテレビとかで見る拳銃そのもので、ずっしりと重たいが不思議と持ちにくさはない。まるで何年も使い古され、完全に自分の手に馴染んでしまった様な感触。引き金を引くまでの所作を違和感なく行える。もう一つは私の身長半分はあるかもしれない長さで、威圧感の装飾を纏った銃だった。片方よりも更に重たく、素人目に見ても持ち上げて撃つものではないことは分かった。長方体の集合、直線によってのみ構成された番^{つがい}の武器は、その銃把を手に握ると瞬く間に思考がクリアになり、それぞれの持つ特性、適切な運用方法が頭の中に入ってくる。それをマニュアルによる情報と言うより、先天的な事実として理解させられたことに、彼らの持つ技術力の高さを思い知らされる。無機質なそれは外見を裏切らず、二つとも戦う以外の役割を一切捨てていた。

そう、私たちは戦うのだ。その為に私たちは彼との契約を結び、『使命』を背負

う。そしてその完遂の暁には各々の願いを叶えるという『対価』を支払うという。

だけど、私はまだその対価を決め兼ねている。誰しもが初めから定めているわけではない、そう彼らは言っている。けれど今の私にはこれと言って不満があるわけでもない。叶えたい夢もない。だから、立ち向かうことに戸惑いを残してしまう、決意みたいな物が全くない。だったら、私がどうしてこんなことをするのか。……

はつきり言うとも自分でもまだよくわからない。成り行きでなってしまう以上、そんな言い訳を言える立場ではないけれど、それが今の嘘偽りのない気持ちだった。ただ少しだけ思うのは、今、私の胸に巣食うこの迷いが晴れていくこと、それを願っているのかもしれない。生きてきた中で望むことはなかったけど、誰かのために何かをしたこともなかった。頼るわけでも頼られるわけでもない、宙ぶらりんなこの心を何処かに落착かせたい。カッコつけるつもりはないけれど、守りたいものが欲しい、大切にすべきものに気づきたい。しいて言えばそれが理由だろう。それに、私の傍らに立つ瀬玲奈^{せれな}が一緒だというのも後押しになった。

……何がどうであれ最早戻ることは出来ない。星の使者が語る言葉は、まるで戦地に赴く兵士に向けられた煽り文句に聞こえてならない。一抹の不安が、私の体を固くさせる。

「緊張するでしょ。でも大丈夫。初めから出来る人なんて誰もいないわ。私だって成り立ての時は失敗ばかりだったから」

そう言うって私を勇気づけてくれたのは、奇しくも同じ高校の先輩である彩芽^{あやめ}だった。

「でも、彩芽さんは私なんかよりもずっと勇気があるじゃないですか。あの時、私達を助けてくれた時みたいに」

「そうね、でも勇気なんて慣れみたいなもの。何事も経験あるのみ。しっかり私について来れば大丈夫。後輩にはかつこいいとこ見せないよね」

「じゃあ期待しますよ！アヤ先輩」

まるで子供のように目を輝かせてはしゃぐ瀬玲奈。その姿を見れば、彼女は本当に自分で望んだことなんだと分かる。彼女はいつも優柔不断な私と比べて、はっきりとモノを言う性格で、どこまでも前向きだ。だから彼女は後悔をしないし、いつも最後までやり通す。時々それが作り物に思えてしまうほど、真っ直ぐで力強い彼女の生き方。きっと私なんかとは比べようもなく強くなくていくだろう。だから私もそれを見習って、たくましく生きていきたい。その為に今私は闘いに身を興じるのだろう。

「さあ、そろそろ行きましょうか」

彩芽は踵を返し、歩き始める。それについていく私と瀬玲奈。夜の暗闇が無性に怖かった。ふと後ろを振り返ると、そこにさっきまでいたはずの星の使者の姿はなく、ただ声だけが残っていた。

「二人共目覚めることを忘れないように。明日の光は常に訪れるのだから」
希望に満ちた激励があるいは警句か、どちらにせよ少しは気が晴れる、そんな気がした。

2・2 初戦

真夜中の大通り。建物の隙間に隠れ、獲物を偵察している彩芽。

「見て、あそこにいる」

彼女が目配る先には、『悪夢』がいた。

点々と光る電灯だけが頼りのこの狩場で、私は初めて獲物を眼の前にする興奮を覚える。「あれが、私達の獲物」

自然と口から溢れる言葉。

「そう、あれが『悪夢』。ヒトの心に巣食って、最後には食い潰す。あれに取り憑

かれればひとたまりもないわ」

「あんなに大きいなんて……。あの時のはもっと小さかったのに」

瀬玲奈が驚くのも無理はなかった。私達の身長の数倍ほどはある巨体。恐怖を感じないほうがおかしいだろう。幽かに揺らめくその体は、電灯に照らされ異質な姿を私達に示す。まるで抽象画の世界からひょっこりと出てきたような化物。緩やかな楕円と鋭利な三角形が組み合わさった胴体に、波のように幾何学的な模様が絶えず動き回って、眼が痛い。そして、現実離れた異型からとどころ生えたヒトの手足。ただそれだけが纏う現実感が、私の頭を混乱させる。

「そうね。あれはかなり育っている奴よ。たぶんここ最近悪夢を見なかったのも、あれが共食いしていたからだと思う。……初めての相手にしては少し強すぎるかも」けれど、彩芽はいたって冷静だった。影に身を潜め、獲物の動きを見極めている。

「アイツ、かなり太ってるから、動きは鈍いよね。一発一発の攻撃は重たいかもしれないけれど、避けることはそんなに難しい」

「でも、私たちは——」

「分かってる。だから華南は私を援護してくれればいい。丁度それが出来る武器だし、相手の注意を私が引いていれば攻撃される事はないでしょうし」

「あの、私はどうすれば？」

「瀬玲奈は私とついて来て。相手の後ろに回り込んで、とにかく斬りつけるの。大丈夫、戦い方は武器が教えてくれる」

「分かりました。頑張ります」

さすがの瀬玲奈も緊張しているのだろう、額に汗がにじみ出ている。私も心臓がバクバクして、息をするのが辛い。

「3つ数えたらいくわよ。準備はいい？」

二人共頷いて返事をする。3，2，彩芽が指で数える。――1。

「出るわよ！瀬玲奈走って！」

「はい！」

物陰から飛び出し、彩芽と瀬玲奈は一目散に悪夢へと飛びかかる。私は銃を、銃に教えられるがまま、見よう見まねで構える。彩芽はまるで動物のように速く、すでにその間合いを数歩のところまでに詰めている。洗練されたその動きにはある種の美しさを感じる。背後に迫る人影に気付いたのか、悪夢はその図体のつそりと動かし、私達を見る。

一瞬、何故か目があった。そんな気がする。前線の二人ではなく私に狙いをつけ

たのだろうか。だとしたら、やられる。背中から汗が吹き出る。あるはずのない眼に追われている。焦燥感はじわじわと私を締め付けていく。

怖い。

……いや、そう感じたただけだ。恐怖を押し込んで私も前に出る。銃を構えて照星に目標を合わせる。すると、震える手は自然と静まり、

2・3 邂逅

「危なかったわね」

大人びた少女の声に、私は我に返る。地味な衣装の上に暗い緑色のロングコートを着込んだ女性の姿は、おおよそ現代、特にこの国では目にすることのない格好、しいて言えばおとぎ話の中にいる人物のようだった。

「もう少し遅かったら駄目だったかもしれない。二人共怪我はない？」
なんというかとても親近感のわく人だ、そう感じた。

「あ、はい。大丈夫です」

まだ状況をうまく理解出来ていない、そんな感じで返事をする瀬玲奈。私もまだ何

も把握できていない。特にどうして何も出来なかったのか、あんなにも怖かったのか。安堵の言葉や感謝の礼よりも先に、その疑問の解決を私は望んだ。

「……あの、さっきのアレって何だったんですか。私、なにも——」

「逃げることでさえできなかった、なんて当然ね。あれはあなた達の常識が通用しない相手。私たちはあれを『悪夢』と呼んでいるけど、正直に言えばほとんど何も分からない。形状も千差万別、知能がありそうで無さそうな不思議な行動。それでいて人の精神に干渉、理解していると言ってもいい、あなた達がここに誘い込まれたのもそのせいよ」

「誘い込まれた？」

「ええ、そうよ。あなた達最近悪い夢なんか見たりしてないかしら？ 暗い、陰鬱な、逃げ出したくなる様な夢」

「見たことあります。ていうか、今日見ました。なんかこう、暗闇に引きずり込まれて、ずっと溺れてるみたいな夢でした」

瀬玲奈の言う夢と私の見た夢はほとんど変わらない。同じ夢を見た、と言うと彼女はやっぱり、と言った。

第3章 狩人、その使命

3・1 after_awakening

夜の出来事がまるで嘘だったような、苦痛のない目覚め。むしろ、普段よりも快い。ふと脚を触る。擦り傷などどこにもなかった。

学校からの帰り道、血染めだった道に触れる。あの夜、初めての獲物を狩ったあの時と、見たもの触れたものは全て同じだった。

まるで変わらない、アスファルトのザラザラとした痛み。

〈それが、過去と現在とを共通する感覚だと誰が証明できるのだろうか〉

第4章 溺れる魂、付随する肉体

4・1 isolation, break

突き刺さった剣、血まみれの体。コンクリートの壁にもたれ掛かるエナの先には、突っ伏せた瀬玲奈の体が夥しい血とともに転がっていた。

「痛い、痛い痛い痛いイタイイタイイダイ、イダイイダイ……。なんで、こんなに、痛いよ。どうして、はあ、あ、目が醒めないのよ！」

腹の底から湧き上がった彼女の憎しみの声。聴くものを道連れにしようとする怨嗟。

「嫌だ。死にたくない。死にたく、ない」

生きることを望み死を嘆く声は、やがて生きとし生けるものへの呪詛となり、その狂気にも似た生への執着を露わにする。

「――殺してやる。殺してやる。殺してやる。殺してやる。殺してやる。殺す、殺す、殺す、ころす、クロス、クロス、クロス……！」

苦しみの声は全てを呪い、理想に侵された体は死にゆくばかり。

そう、瀬玲奈は死んだ。肉体は紛れもなく死に絶え、すでに冷たく、生きることが諦めている。それなのにまだ動く。彼女の執念。短くしかし強大な妄執が、現実すら冒し、歪め始めている。

――心は、魂は、何かは、『紅上瀬玲奈の生存する』世界への収縮を渴望する――。

「うう、ヴァアアアアア、アアアアア。アアアアア、ツ……」

理性を失い、宿痾に敗れ、心を引き裂かれた悲鳴。

華南はもう耐えられなかった。ただそれだけだ。けれど彼女が瀬玲奈を殺めるには十分過ぎる理由だった。

瀬玲奈の首にそと手をかける。

力を込める。

吐息を感じる。

生ぬるく。

……冷たい。

紅上瀬玲奈はここで死んだ。少なくともそれ以外の可能性^{セカイ}は、ない。

息の荒い、魂の底から生きることを望んでいる、彼女には似合わないその呼吸は、けれど死の間際を克明に記している。何人であろうと、耳と目を閉じ口を噤みその事実から意識を逸らすことなど、許されるはずはない。それは死にゆく二人を看取る華南にとっては尚更だろう。だが、それはあまりにも酷い。

流れ出す血を飲み込みながら、エナは華南に向けて話し始める。

「これが、現実から逃げ続けて来た愚か者の末路——置いてきたはずの体もいつの間にかここにいる」

まるで自嘲の様な文言は、彼女の諦めを鮮明にしていく。

「ああ、こんなに血がいっぱい。——体が冷たい。全部、夢だったのに。流れる血も、痛みも、体も、全部、全部、目覚めれば何もかも消え去っていく。それで気づけばよかったんだ。本当の自分、その在処を。だったら、もう少しマシな生き方が出来たかもしれないのに」

息を大きく吸うエナ。血反吐を吐きながら咳き込む姿は、枯れていく老人の様だつた。
「ああ、でも、そんなこと考えないのが普通、よね」

第5章 幼年期の終わり、ヒトの終わり

5・1 endless_guilt

終端の広間に舞い落ちる小さな球体。その表面は水面みなものように揺らいでいる。まるで原初の海、すべてが混沌とした暗い色に溶け込んでいたように。そこそが最後の悪夢、幼年期の楔。これを解き放てばすべてが終わる。文字通り、すべてが。だから私はそれを殺さなければならぬ。だがそれはあまりにも弱弱しく、かつての獣のような悪夢たちに比べれば、愛くるしさすら感じる。まるで自らの赤子のように、子供を産んだことすらない私にさえそう感じるのだ。その感情に刹那、心は揺らぎ、刃を握る手から力が零れ落ちそうになる。だが、やらなければならない。私の後ろに立つ彼女……彼女たちとの契約を果たさなければならないのだから。

「万城目華南、君の使命を全うするべき時だ。その身に誓った約束、忘れたわけではないだろう」

「ええ、わかってるわ。私が、すべてを終わらせる。その罪を背負って……」

「君の罪ではないよ。それは僕たちが贖うべき罪だ。僕たちの終わりのなき殉教。狂信にも似た、けれど取り返しのつかないと理解しているこの螺旋運動を、僕たち以外の知性体が続ける必要はない」

彼らの独白はいつも哀しみに溢れている。厭世観と、しかし使命感に満ちたその言葉の重さを、私は今になってようやく理解できる。彼らとの対話にあった気だるさはその相互理解の欠落だったのだ。

第6章 彼方の断章

6・1

かすかに聞こえる銃声、爆音。無論、無機質なスピーカーからの音でしかない。生き残るべき人間を選定するための戦争。理論上の最大値、百万人へと近似させる為の計画的殺戮。自由を謳う連合も、秩序を敷く共同体も、互いに争う中、その使命を共にしているにすぎない。欺瞞に満ちた、無意味なこの行為。多重の防壁に囲まれたこの聖域に座する私達十六人は、許されるべきではない。私はふと思った。今すぐこの扉を開き、武器を手に取り、淘汰の世界に身を棄すべきなのだろうか。いや、それはダメだ。計画の末、新たな領域に引きずりあげられた人々を導く存在が必要なのだ。その為に私たちはわざわざこの冷たい棺に引きこもり、淘汰を免れ

ているのだ。残された時間も、あと僅かになる。ターミナルにはシステムの各通知が夥しく表示され、刻一刻と刻まれるカウントダウンに思える。そして、コードの入力を求められる。事前に決めた任意の文字列を入力し、承認をする。それが十六人分完了すれば、全てが終わり、そして始まる。

第7章 構想

7・1

不意に近づくエナ。重ねられた唇はしつとりと濡れている。状況を理解出来ないまま続けられる行為は、拒否する暇を与えない。押し入ってくる舌が私の舌と絡まり、そして抜けていく。瞬間、漂う風味に私は咽る。血だ。紛れもなくそれは血の味。それが彼女の血であることは疑いようもなく、だからこそ、私は得も言えぬ嫌悪感を抱く。

「これが血。死ぬこと傷つくことの味」

噛みちぎられた下唇から流れる舐め、神妙な顔つきを見せるエナ。何かを達観したかのように、彼女は語り始める。

「小さい時、ふざけて錆びた鉄棒を舐めてみた事があつた。錆びた鉄の味は、血の味とよく似てる。でも、何か違う。同じ鉄の味なのに、生き物の味は、生きている味はこうも私達の感情を刺激する。今アンタが気持ち悪いって思ったように」

7・2

天と地を結ぶ扉。かつて私達が辿り着いたと思い込んでいたそれは、その実妄想に過ぎず、結局私たちは物質に囚われたままだった。凍えた光の格子の中に、その意識を移したとしても、その本質は変わらなかったのだ。だが今は違う。天上に開く禍々しい、まるで獣の口の様な孔は、けれどこの世界と『何か』をつなぐ唯一の形であり、我々には辿り着けなかった尊きものなのだ。

シナプス——タンパク質の壁に囲まれ、束縛されていたヒトの魂は、その姿を容易には晒さなかった。かと言って頭蓋を切り開き、脳を弄つても誰もそのカタチを見ることは出来ない。それは名状し難い、言語的説明の付かない方法によって原始の生命と癒着し、過去、現在そして不確かな未来をも結ぶ、意志の不可視な苗床となつたのだ。だが今やそれは我々にも見える形となつて天上へと昇っていく。深

青の尾を引き、純白の衣を棚引かせ、新たなる世界を祝福する彼らの姿を見て、私たちは得も言えぬ感慨に浸った。

かつての私ならば、この結末に憤慨し、落胆するのだろうか。少なくとも己の無力を恥じるだろう。まさにそれは今私が感じているのだから。だが嘆きはしない。怒りもしない。むしろ歓びに近い高揚が、私の心を支配していた。

本体との通信が途絶した。極点に近いほど崩壊の度合いは緩やかになるのだろうか。爛々とし、世界を遍く天使の輪。そのあまりの美しさに見惚れている中で、ほんの僅かに、聴覚のノイズを感じた。

明らかに人工的な音色。

周期的に揺らめく流れ。

不思議と心地よかった。

瞬間、それを理解した。

新たなるを讃える頌歌。

それに違いない。

ああ、見たまえ。

——今宵はこんなにも星空のきれいな夜だ。

7・3

それは現状の有機物を構成する水素や酸素といった非金属元素や、生命活動に必要なナトリウムなどの金属元素の性質と極めて類似している。しかしその内部構造はまったくもって確認できない。現行の観測手段を尽く拒絶し、その神秘を隠し通している。ただ、水素原子との相対比較により分かる質量はおおよそ電子の整数倍と等しく、しかも不確定性原理から逸脱し、位置情報と質量を同時に確定することが出来ている。

7・4

「本日未明、河川敷の高架橋下にて是枝彩芽の死体が発見された。我々の検分では遺体に目立った外傷はなく、また薬物の服用も認められなかった。死因はおそらく餓死、死後一ヶ月ほどは経過している。推測するに何らかの理由により意識不明となり、その後死亡したと考えられる。すでに警察に通報し、遺体は回収。事件性は認められず、問題なく事故という形で処理されるだろう。」

だが、我々の方は大問題だ。このような事例は今まで確認されていない。理論上考慮不可能な状態の発生に、委員会は現在でも集中協議を重ね、対応を模索している。尤も依然として重要視されるのは計画の遂行性であり、それが保証されれば別段この事件を気にかける必要はない。しかし現在我々が注視している集団、橘春香を中心とするグループについては早急な対処が求められる。現状狩人にとって最も脅威となる存在である彼女たちは、我々の計画において、明確な不穏分子である。

特例によって開示された情報を持つ君にとっても、最早他人事では済まされない。彼女たちは君をあからさまな殺意を持って狙うだろう。何のための君に我々の記録を明かしたのか、理解出来ない訳ではないだろう」

7・5

ざーざーと耳に刺さるシャワーの音、規則的な秒針の音、胸の内から響く鼓動でさえも、この静かな夜の世界では私の意識を乱すに事足りる。ふと気がつけば、ベッドに伏せながら、じっと一点を見つめている自分がいた。

風呂場から漏れ出る光。中には瀬玲奈が入っている。私は彼女のあとにシャワーを

浴びるつもりだったが、彼女はやけに長く入ったままだった。日頃、彼女ももっと早く、長くても十分ほど出て来るはずなのに、今日はもう二十分以上も経っている。普段ならそんなことを気にする必要はないのだろうけれど、私の頭の中には、あの時のうなだれていた瀬玲奈の姿が離れなかった。彼女は今、苦しんでいるのだろうか。だとしたら自分は何をすれば良いのだろうか。

ためらいはしたけれど、やはり、居ても立ってもいられなかった。ベッドから起き上がり、風呂場で服を脱ぐ。

「……はいるよ」

声をかけても、中から返事はなかった。それでも扉を開ける。垂れ流されているシャワー。熱気が充満した室内の、浴槽の縁に、瀬玲奈は足を抱えて座り込み、その綺麗な白金色の長髪を垂らして俯いていた。入り込んだ冷気に気付いたのか、顔を上げ、驚いたように私の方を見る瀬玲奈。その顔は心底疲れ果てていた。

「あつ、先輩。……すいません、お湯出しっぱなしにしてて」

あくまでも彼女は普段通りのままでいたいのだろう。でも。

「そんなことじゃないでしょ」

「えっ——」

「嫌なこと辛いこと、なんでもかんでも一人で抱え込まないで。

——何のために、瀬玲奈は今、ここにいるの？」

Sometimes, we had been thinking a one thing; About that this world which we live in was made by either some great one like a god or god himself.

「私達は時折、神秘主義的な実在論者になるんだ。この世界は確かに、数学や論理的記述によって完全に普遍的に表されて、私達自身もまたその一部であると。そしてそれらは、不可知で一意的な創造者によって設計され、彼もまたその中に内包されていると。私達はただその自覚をしかつていてだけで、言い換えればプラトンのイデア界、その地図を作っているだけだと。だったら、こんなことに意味はあるのだろうか。私達のこの繰り返しさえも、それらに予め記述された順路だとしたら。いや、これ以上はやめよう。ただ一つ言いたいことは、私達は決して君たちよりも遥かに優れているということではないということ。この世界の真理を知らない、ただの愚者であるということ。そして、未来も過去もない、孤児であるということ。」

「宇宙的慈善活動家。誰が言ったのかは覚えていないが、私はこの言葉を大いに気に入っている。まさしく我々そのものだ。一步道を踏み外せば、それは偽善にも

なるし、独善にもなるし、だが正しくあれば本当の善にもなる。」

この世界にはなぜか、この世には自分と同等か或いはそれ以上に賢い人間しか存在しないという不確かな事実を盲信していて、それに当てはまらなないと『勝手に見なした』人間を、馬鹿だの愚か者だの、アイツは古いなどと不必要に攻撃する人間がいるのだ。そしてそれは、本人の賢さには依拠しない。

Similar to that vegetables is got to rot, we will falling down to endless distance.
But fragment of our universe will continue to remain, as the shell of the egg does not rot.

孵卵主義者によると、現在の宇宙のエネルギー準位は理論上よりも早く下がっているという。彼らに言わせてみれば、それは卵の中の栄養が枯渇しつつあることの証拠だという。まったく馬鹿らしい。

Wound's reality

最初は単なる事故だった。本当に、本当に、本当に、本当に。手を滑らせてカッターを落としてしまった。驚くほどきれいに、刃は私の手首から腕にかけてを切り

裂いた。5センチ程だろうか。幸い傷は浅く、病院には行かなくても良かった。傷もいづれ消える。けれど、表皮の下を切り裂かれた痛みは、『痛くない』とやせ我慢できるほど、生易しいものではなかった。

左腕の痛みに悶えて、涙目になる。
痛い。

だけどその時に気づいてしまったのだ。

痛みは、私の心を晴らしてくれるということ。

それはもう嫌というほどに、生きている心地がするのだ。それと共に、またあの『あやふや』の中に引き戻されることを恐れるようになった。生きているのかも、死んでいるのかも分からない、永遠の中へ。

恐れはいつか、もつと現実的な行動へと変化していった。

—— 生傷は疼き、かさぶたを剥がせば、また血は滲み出す。痛みが戻る。

結局、その傷が癒えることは、なかった。

心の鎮痛剤。痛みは万能の処方。けれど、耐性はあらゆる薬に対して生まれる。痛みにしてもだ。

ダメだとは分かっていた。

カッターを取り出して、刃を出す。……血に錆びていた。歯切れの悪い刃は、強く押し当てただけでも痛かった。皮膚が引っかかるような感覚。ピリピリとする。いつの間にか切れていた。

恍惚な私。血の赤は鮮烈で、私を酔わせる。それは確かに私の心を握りしめ、放さない。同時に私は嘔み締めているのだ。ああ、生きている、と。

血は固まって、赤黒い。またやっちゃった。後ろめたさを無視することが出来ない。血を拭って、まだ暑いのにパーカーを羽織る。

白いパーカーだ。

血が滲み出して、赤いシミにならないだろうか。誰かにこれが、バレてしまうのだろうか。

そう思うと私は――。

これ以上はやめようと思った。

じゃないと私は、誰からも愛されないから。

自殺は「心理的視野狭窄（逃れられない心理的苦痛から解放されるには自殺しかないと考えたりすること）」の末に行われるものだという。しかし自傷は、「自殺が、脱出困難な苦痛を解決するために、『意識を永遠に終焉させる』方法であるのに対し、自傷は、自分の意識状態を変容させることで何とか苦痛を『一時的にしのぎ』、その瞬間を『生き延びるため』に行われる。」という。或いは「自殺とは『苦痛しか存在しない世界からの脱出』」であり、「自傷とは『苦痛に満ちた世界を耐えしのぶこと』」である。

「自傷とは、自殺以外の意図から、非致死性の予測をもって、故意に、そして直接的に自らの身体に対して非致死的な損害を加えること。」

自傷者の自殺リスクを高める原因は、辛いときに周囲に援助を求めることが出来ないからである。援助者は自傷行為を頭ごなしに否定してはいけない。それは自傷者

の否定であり、援助希求能力を潰すことになってしまう。援助者はまず、自傷行為を告白したこと、治療の場に出たことを肯定するべきである。自傷は本人にとって望ましいことではないが、そうしなければ他者に暴力を振るったり、自殺してしまったりしていただろう。他人を傷つけるよりも自分を傷つける事が悪いと思う人間はいない。たとえ自傷者が何ら深刻さのないあっけらかんな態度をとっていても、それは自傷によって一時的に辛さを抑えているだけである。

たとえば「切っちゃった、テヘッ」といった態度を示す彼らの真意は、「たしかに自分を傷つけてしまったけれど、それでも自分を大切にしたい」という気持ちがあるのだ、と理解すべきなのです。ですから、傷の手当てに訪れた彼らに対する第一声は、こんな言葉にするべきです。「よく来たね」。

「自傷・自殺する子どもたち」松本俊彦